

遊戯による子供の想像教育

東京女子高等師範學校講師

大石 峯 雄

ヒッベルが嘗て、「想像は心の肺臓である」。云ふ味ふべき意味の言葉を我々に與へたことがある。

この譬喩的な言葉は實によく想像の本質を價值を説明してゐるやうに思ふ。想像はまことに精神ガイストの力であり、それによつて總ての心の力は生命に充ちた息をするこゝが出来るのである。思索には理解の働きが基礎として必要であるやうに、想像は又理解の基礎となり、必要條件ともなるのである。かゝる意味に於て詩人ゲーテは、

「想像こそは實に思索への入門である」。述べてゐる。

想像を以て「心に描く思索」であるミ端的に呼んでゐる人がある。これは更にゲーテの

「我が思索は直観であり、我が直観は思索である」。

云ふ言葉によつて明かにせられ、簡明にまことの意味が表はされてゐるやうに思ふ。

彼のこの言葉は、總てのすぐれた藝術家や天才の精神の姿を示すものであり、同時に具體的なもののみ考への途を進め、少しも抽象的な働きを表はさないところの子供の精神の様相でもある。併しながら想像は又理解に依存してゐる。理解（了解）は想像の形象をばはつきりさせ、區切りをつけ、瞬時にして漠然としたものを排除し、更に又誤つた想像に走るこゝを防ぎ、いたすらに盲想にふける云ふやうなこゝをさしこめる。記憶の要素として、言語、形象、音調等が考へられるが、心の奥底から出たところの想像は、是等の記憶にまつて最も必要な基礎をなすものである。感情の方面でも

想像によつてその熱情及び最も心の深きところにあるものを感じるにいたらしめるものである。更に意志ですら想像に依つて非常な影響を受け、一度意志によつて決斷せられるや、それに對して敢然と實行するやうにまで想像の力は及ぶ。かくして、健全にして正しき想像の働きのないところでは、充分なる精神生活ゲスツトリスレーベンをば考へるこゝすら出来ないこゝ云つてもよいであらう。

二

子供の精神の發達に對して想像はかくの如く重要な意味を持つてゐるのであるが、然らば如何なる手段を以てその正しい教育をなすべきであるか云ふこゝが、今や吾々の當面の問題となつて來るのである。想像を發展させるにはいろいろの方途が考へられるであらうが、私はこゝで特に遊戲運動によつて子供の想像を教育せんこゝに専ら關心を置くこゝにしよう。勿論、想像を發展させるために如何なる手段を以てするにせよ、秩序ある想像教育一般に對して重要な要素は有能なる人格であり、然も自らの教職に對して眞劍に働きかける人格であるこゝを考へなければならぬ。従つて私が之から述べようとするこゝもこの要素が前提をなすのである。

正しい運動遊戯ツルンシュピール——此の言葉はヨハン・マルケルの著「遊戲運動小篇」によく出て來るのであるが、——に於て、子供は自らを表現し、表現することによつて彼等の世界を更に想像する。即ちこゝに於ては教師から受ける壓迫さか束縛さかを完全に無くした状態に於て自らを表現し、そして喜びに満ちた活動さ、心からなる運動をなし、かくして子供の想像力は充分に發揮されるのである。そこで先づ第一に動物運動の模倣——蛙のミビまね、兎の走り方、馬の歩き振り、小犬や猫の運動、猿のさまぐの動き、泰山のやうな象、さてはカンガルーの姿態等舉ぐれば無數にあるであらう——を行はせ、次に手業のやうに人間生活の中にあらはれた一場面をば、子供達の目に映じた總ての活動的な交渉を遊戯化した表現形式に於て模倣し、従つて子供達に想像を働かすための機會を豊富に與へるこゝが出来ぬ。又小さい子供達に取つて最も楽しい

童話や物語を聞いたり話したりする中に、子供達は何の工作も又技巧もなく全く物語中の人物となる。或は又それに關係する動物——ときには草木すら生かして——等に完全に成り切つて、(主として客が完全に合一する)こゝにははれない、無限に伸び行く彼等の世界を想像し、遊戯的に表現する。かくして子供の想像の發展に對して最も價値あるものであり、將に束縛から放たれた子供の心を目ざますものでもあり得る。唱歌を加へることは、それによつて更に想像の働きを促進せしめ、併せて表現させるに云うやうな役割を持つのであると思ふ。

以上述べたやうに、運動遊戯によつて子供の自由な想像を發展させる企圖を、私は實際に見たり聞いた事によつて更に補つて見たい。話は今年の夏、本幼稚園協會によつて企てられた講習中に於ける戸倉先生の體驗談を、それをひそかに見てゐた私の感想を織り交ぜたものであつて、恐らくこうした事柄は實際幼児と共に生活せられる諸先生は日常茶飯の出來事であり、或は更にすぐれた實例も尠くないと思はれるが、僅かに一例として擧げてみたいと思ふ。

戸倉先生の遊戯の講習で先づ第一に目についたことは動物の動きのまねであつた。先生は先生の考へ又は運動形式を子供に模倣させるに云ふやうな方法を全く棄てられた。その意圖は、子供が動物園や公園やその他あらゆる場所で動物について動作を直観し、而も彼等に於て動物になり切るだけの自己放射性を見、自らを完全に動物にまでうつし込むべき動物と子供は一體になり、それだけに益々直観は深くなり、さながら天才のそれにも比することが出来るやうになるであらうに云ふ意圖からであつたやうに思はれる。更に云へば、想像の發展は束縛をなくし、自分自らをも總てなげ出すところから自由な世界が開かれるであらうに云ふやうな考へからであつたかも知れない。題材は「象であつた。先生のうまい誘導で彼等の想像は次第に象の世界に變りはじめた。彼等は先生達の前でそれを表現したではないか。「象におなりなさい」と仰有られたとき、そこには全く人の子ならぬ群象がのそり／＼と歩き初めた。中には大きな鼻をまき上げるものもゐた。先生は又一言、「象はもつ／＼と／＼と歩きますね」。云はれた。子供には何の姿態も教へられなかつた。さうする

だらうかま心待ちに見てゐた。兩足を以て足首をつかみ、さながら大きな象の現はれのやうであつた。——私はこゝで多少不思議に思へた。小さな子供達の象の表現でも、象になり切るこゝが深ければ深い程、大きい象に感ぜられる。心の表現は外形的な姿の大きさによるのではないとすら思へた。——こうして彼等は象を想像してゐるのであらう。想像しながら嘗て見た象の姿を再現し、益々象に深くなり切つてゐる。然るに同じ講習會で大人にもさせてゐられたのを私は見た。こゝろが大人が試みた象はてんで彼等子供達の足もこにもよりつけなかつた。恐らく大人は象になり切れないからであらう。動物の心になるにはあまりに有邪氣でなかつたらうか。心の表現は正しく外に表はれる姿であり、顯現する様相である。少しく冗長になりすぎるけれども更に一例を書くこゝにしよう。之も同じく戸倉先生から話されたこゝである。時は今年の夏、こゝろは東京女子高等師範學校附屬幼稚園。題材は私共の言葉に譯して見るに、「植物が芽を出して、それが大きくなり、花を開き、そこに美しい蝶が春を唄ひながら花に憩ふ」と云ふやうな場面」を表現させ度いと云ふ意圖からであつた。聞く。「種を蒔きますよ」。先生はばら／＼種を蒔く、耕された畑の土の上に籠の中からまかれた種を子供達はもう想像し始めた貌があつた。子供はこゝろ／＼種になつてこちらにこゝろがり、あちらにこゝろがりした。種には未だ土がかけられてゐなかつた。先生は「まだ立てつてゐる種がありますから、今度は土をかけますよ」。云はれる。ばら／＼ばら／＼土がかけられる。子供は土の重りでみんな體を小さくして、すくんでしまつた。雨が降つて来る。水もかけられた。ぽか／＼太陽の光が、かけられた土を通して種にあたつて来る。そこで種はそろ／＼ふくらみ初めました。かぶさつた土をかきつけて子供達の種は伸びて行くではないか。むく／＼と、大きく伸びてしまつたのもあり、未だ充分伸びてゐないものもある。見てゐる中に五つ六つ花が開き初めた。あたかも蝶の憩をまつばかりにして、こゝで先生はきれいに咲いた花を五つ六つ残して、他の子供達に「蝶になりませう」と話された。蝶は両手のはねをたゞいて、あたかも春の野に花を尋ねる姿そのものであつた。花を見つけてそつ／＼まる。又他の花にも靜かにいこふ。……こうしてゐる子供達の生活を考へて見るに、

今書いてゐるそのこゝすら子供になり切れない私、まして植物になつたり蝶になつたりするこゝは可成にかけはなれてゐる私には、物足りない、子供らしくない、こゝによる大人じみた考へ方で想像をめぐらすこゝ云ふやうな心配すら持つのであるが、敢てこうした子供の運動遊戯を考へて見るこゝ、彼等は遊びながら想像し、子供の想像は更に動物をも靈化し、従つてそのものミ一體になり、又動物になつたにしても、或は花を、或は野を、或は自らの姿態をミ、要するに彼等がこれまで経験したあらゆる周囲の姿(周囲ミは大人の考へで子供達には全く合一したものであるかも知れぬ。そして主客未分ミ云つてもよいかもしれない)。を想像してゐる。想像は教へるものではない。従つて遊戯も又いたづらに教へるものでないこゝが私はこのお話ですつかり理解出来たやうに思へる。大人はさうしても子供のこうした直観には及ばないであらう。假令、直観出来たこゝでも抽象的なものに終るこゝが多い。

三

言葉や遊戯ミ云ふ裝飾によつて所作を變更し、變化し、或はありふれた物語や童話を變改し、更に子供のそのまゝの世界にまで作りかへ、或はそれを廣げるこゝ云ふやうに、想像に對して自由な領域ミ充分なる餘地を與へるこころの子供の遊戯こそは望ましくもあり、又すぐれたものであると思ふ。例へば「城攻め」ミ云ふやうなもので説明して見やう。此の「城攻め」では大たい肉弾戦が行はれてゐたのであつたが、子供達が今日のやうにボールをよく使用するやうになつたこころでは、「お城」に手でボールをなげるか、又は足でボールを蹴るかし、「お城」の中で守つてゐる人々はその攻撃に對して己が城を固守するこゝ云ふやうにするこゝが出来る。同様にしてよく行はれてゐるこころの「鬼テイル」ミ云ふやうなものを子供達の力でいろくくに變更させるこゝが出来る。又 虎ティグル ボール等はよく獨逸あたりで行はれてゐるやうであるが、子供に相當したやうに、例へば一匹の「虎」がおりの中に走つて居り、おりになつてゐる子供達が此の虎にボールを投げる遊戯ミして行はせるこゝが出来る。一匹の虎の代りに「親虎」ミ「子虎」の改正を考へてもよい。いづれにしてもこうした遊び

は半人工的、半自然的き云ふやうなものであるけれども、此の際子供は猫になつたり、鼠のちよろしくした走り方にもすぐなれる。虎になれば虎の姿を具へ、獅子になれば獅子の威厳すら持つこゝが出来来る。だからこんな半人工的な遊戯でも、單なるボールの遊びささせ度くはない。何にでもなり切れるこゝこそは子供に與へられた唯一の世界であり、大人には模し得ないこゝろである。或る人が「年のへだたりはかくまで直觀の世界にへだたりを作るものであらうか」。云つて歎息したのを聞いたこゝろがある。繰返して云ふやうではあるが自分と周圍が同一になるこゝろに子供の想像は自由に發展し、心の力さなるこゝろの想像は遊ぶこゝろによつて生きた形となつて成長するのである。

此の發展に於て、吾々は——勿論それが可能である限り——ゲーテの

「子供は教へられるよりも、よく活氣あるものを慾するのである」。

云ふ説明に従つて、私共は子供を本當に伸して行き度いものである。

幼兒や小學校の最下級生に對して彼等の自由な想像作用を壓へ、束縛するきには、イギリスでよく見られるやうな、律則づくめのボール遊びをするき云ふやうな珍現象が見られるであらう。運動遊戯が完全に作り上げられた競争遊戯としてその最も高い程度の完全さになるきには、下級の兒童さか幼兒には不適當であり、かゝるこゝろを強制するきには此の時代の最も自由な想像の發展を妨げ、就中それが成熟せる大人を前提さしてゐる限り全く何の役にも立たないのである。

四

更に健全なる想像教育に對して、子供達が共働するこゝろ、遊戯道具が簡單であるき云ふこゝろが大切である。此の二つは、夢想的であつて然も想像的な子供には、人間及び物について彼等の想像力が伸びて行く限り有效なものであり、次第々々に現實的なものについて考へ、現實的な觀察法に達するこゝろに對して役立つものである。

特に團體遊戯(社會的運動遊戯)が一面に於て持つこゝろの特色は、結局團體的運動遊戯に於て共同して遊戯する遊び仲

間に對して對人的に多方的な交渉を與へる機會を多分に持つてゐることを云ふことである。又遊戯道具にしても、自らは何の努力をなすことなく、又己が才能を殆んど現はす必要がない程の美しい完全なる玩具が充滿してゐる倉庫の中に居るものにも比すことが出来る子供の側からすれば、何等活動することなく嘆美と享樂を感じるやうな道具(例へば機械的にひき上げるこま)が出来る玩具、鐵道がついて自動的に走る汽車、或は又自動車の如きは彼等の遊戯に對して役立つであらうこと云ふやうな皮相的な考へをば反省しなくてはならないと思ふ。子供の想像は簡單なる玩具(遊戯道具)から健全なる榮養を取るこまが出来る。だからゲートも、

「余は想像を破壊するほどの贅澤な玩具を憎む」。

こ云ひ、イエン・パウエルも亦

「豊富なる現實に於て想像はおころへ、従つてその芽生すら萎み行くであらう」。

さてゲートに賛意をよせて居る。子供の遊戯體操シユビールツルネンに對する簡單な道具として次のやうなものが考へられる。即ち種々なる大きさのボール、小さな木棒、跳繩、振繩、引綱等々がある。

こゝで最も重要なものは四千年以前既にエジプトの少女たちに嬉ばれ、恐らく地球上いたるところで何等かの形式に於て見られるところのものは毬(ボール)である。大きな子供達が使用するところの毬は競技規則の實行を可能ならしめるところの補助手段である。小さな子供は之に反對に、ボールに於て本當の遊戯の原理を見出すのである。子供達が、それを持つて心からなる喜悅を以て活動すること出来るところの遊戯道具は、彼等に活動性への刺激と活動性への可能性を與へる。

遊戯道具は子供達に對して種々なる物のシンボルとなすことが出来る。例へば卵を象徴して「巢の中に卵を入れる」やう

な遊びに使ふことが出来、切符を以て「鐵道遊び」「電車の車掌さん」云ふやうな遊戯に使用することも出来る。

攀登梯子は同様な意味に於て子供の想像を刺戟することになる。例へば子供にそれに登ることによつて消防夫の働き、屋根屋、果物取り、等々の働きを考へさせることが出来る。

かくして簡單なる道具は、既に完全なものとして、又は出来上つたものとしての遊戯におち入ることなく、寧ろ或るものに芽ばへさせることの遊戯として發展する。子供はこの道具によつて刺戟を感じ、又は生氣をも感ずるのである。かくて古い遊びがその補助手段を尊重したのミ全く異つて道具を見るにいたる。それはあたかも信頼し、愛すべき遊び仲間であるかのやうに、道具を以て計畫し、道具を以て従事する。

以上吾々が見たやうに遊戯運動は子供の想像教育に對して最もすぐれたものゝ中の一つであると思ふ。然もこゝでは子供に即し、上品であつて高貴な想像教育の機會が非常に多く含まれてゐるのである。併しながら總ての遊戯が例外なくすぐれた想像教育の手段であるミは考へられない。成程遊戯が想像教育に對して價値ある根據として、精神作用による壓迫なき状態に置かれ、従つてそこでは最も衝動的に、最も本能的に活動することが出来、彼等の要求水準が高まつて行くにつれ興味は更に加るミ云ふやうなことが考へられ、この間は總て自由なるが故に想像は極めて自由に進展するであらうとも考へられる。併し私は最初に想像の本質ミ價値ミを述べた際に、「秩序ある想像教育」云ふ言葉を使つておいた。子供には子供としての「秩序」があり、それ故に「渾沌」ではない。子供としての「秩序」から子供の眞に正しい想像は發展する。而して子供としての「秩序」を保たしめるものはさうしても教育者の任務である。わづらはしいが一例を取る。遊戯に於ける教師の任務は植木屋に比すことが出来る。想像ミ云ふ木が伸びるのは子供自身である。木の中にはどんな形で伸び、どんな大きさになり得るかの素質の全てを具へてゐる。植木師の仕事は、その素質が完全に伸びるやうに、本當に正しく伸びるやうに外から守り、發育、成長に邪魔ミなるものがあれば取り除き、肥料を與へ、環境をよくするこいふ任務を持つて

居る。彼は或る意味で方向所與的な仕事すら持つてゐることもある。素質自らは比較的渾沌に近いと云つてもよい。この比較的渾沌の状態は植木師によつて、秩序を保つやうに仕向けられる。植木師がすぐれて居れば秀れてゐるほぎ、その木に即した、従つてその子供としての秩序を保たせることが出来るのである。此の關係から考察するまき私はこゝに再び最初に述べたまきころの前提にたち戻ることを許されたい。

秩序ある想像教育一般に對して最も重要な要素は人格である。眞に遊戯運動をば想像教育の手段として價値あらしめるものは教育者自らの「教育者的堪能」により、又これをも併せた教育者自身の人格でなければならぬ。

教職に對して眞剣に働きかける人格こそは遊戯運動による想像教育の唯一の前提であらう。想像の價値、想像の本質を認識しないまきころの教育者が、さうして遊戯による想像教育をなすことが出来るであらうか。(終り)